

女子短期大学生における健康生活の知識・意識・実践 に関する研究

(第2報) 学生生活の充実度に関連する要因

前田ひろみ・田中 純子*・鎌田 俊彦

A Study of Women's Junior College Students' Knowledge,
Consciousness and Practice of Healthy Life

(Part 2) Factors Related to Fullness on Students'
Living at the College

Hiromi MAEDA, Junko TANAKA and Toshihiko KAMADA

I. 緒 言

近年における青少年の体格の向上は著しく、体力や運動能力の点で若干問題があるものの肉体的な面における健康水準は著しく向上している。他方、精神的あるいは社会的な面における健康上の問題として、無気力、無感動で、難しいことをやりたがらず、お客様意識で生活しているなど、自我意識の乏しい青年の増加が指摘されている。総理府の意識調査でも、生きがいの喪失状況にある若者の数は約50%におよんでいる。都市化、工業化、豊かな生活の進み中で、現代の大学生、とくに女子短期大学生は表面的には、明るく、健康的で、楽しそうに見えるが、これらの学生が必ずしも生きがいのある、充実した生活を毎日送っている訳ではない。

学生生活の充実度には多くの要因が関連しているものと考えられるが、とくに衣・食・住・業(活動)の日常生活全般にわたった、肉体的、精神的および社会的な健康生活の知識・意識・実践が深く関わっていることが推察される。前報¹⁾では女子短期大学生について、健康生活の知識・意識・実践に関して調査し、その実態を明らかにするとともに、短期大学生生活を通しての健康教育の効果を検討し、報告した。本報では、さらに健康生活についての知識、意識および実践状態を調べる項目のうち、学生生活の充実度と関連する項目を

多変量解析によって分析するとともに、充実度の良好な学生グループと不良な学生グループの判別の可能性について検討した。

II. 方 法

1. 調査対象および調査時期

調査対象は前報¹⁾の広島文化女子短期大学学生818人のうち761人(93.0%)であり、また調査時期は昭和59年6月下旬である。

2. 調査用紙

アンケート票は前報¹⁾にその全内容を示したが、健康の保持・増進をはかるために、健康生活に関してどれ程の知識や意識を持っており、さらに実践しているかを把握することを目的として作成した。

内容は健康生活に関する一般的な知識・意識・実践状態を問う項目、健康管理に関する項目、さらに生活の充実度に関する項目よりなる合計61項目の設問である。

3. 集計・解析方法

健康生活の知識・意識・実践別に各項目に望ましい答えをした者の割合(正解率)を算出した。前報¹⁾では、この正解率によって学科別および学年別に、学生の健康生活に関する知識・意識・実践状態を検討した。

本報では学生生活の充実度に注目し、健康生活についての知識・意識・実践の水準と学生生活の充実度との関連を総合的に評価するために、多変量解析を用いて検討した。生活の充実度として、アンケート票にお

* 広島大学医学部衛生学教室

表1. 外的基準の作成

生活の充実度 グループ	学 習	現在の生活
良	意 欲 的	楽しく充実している もう少し充実させたい
普通	その他の組み合わせ	
不良	全く意欲的でない	不満足な点が多い 全く不満足である

ける学習意欲と現在の生活状態についての質問項目(設問 I-19 および I-20) を用い、この充実度を表1に示すように、良・普通・不良の3グループに分類した。生活の充実度を外的基準とし、健康についての知識に関する項目を説明変数として数量化理論第Ⅱ類²⁾による分析を行い、学生生活の充実度と健康生活の知識水準との関連を検討した。

同様に健康生活の意識あるいは実践に関する項目を説明変数としてそれぞれ分析し、生活の充実度と健康の意識水準および実践水準との関連を検討した。

数量化理論では、各項目のカテゴリー分布が極端に片寄っている場合、反応の少ないカテゴリーに過分の重みを与える傾向がある。したがって、反応が少なかったカテゴリーの中でその持つ意味が小さいと考えられるもの(「わからない」、「どちらともいえない」等)は分析の上で合併可能な他のカテゴリーと合併した。

本研究の解析には、広島大学情報処理センターの HITAC M-200H を用い、統計解析プログラムの SAS³⁾ および数量化理論 PPSS Ⅱ⁴⁾ を使用した。

III. 結 果

健康生活の知識に関する項目のうち、9項目(設問Ⅲ-2, 7, 10, 12, 14, 16, 17, 18 および 19) は正解率がいずれも95%以上であった。説明変数に加える必要がないと判断されるので、これら9項目は除外した。したがって、健康生活の知識に関する分析の説明変数は11項目、意識については20項目、実践については18項目である(目的変数に使用した設問 I-19 および 20, さらに他の項目である I-21 を除く)。各項目間の相関係数はいずれも0.3以下であった。表2に知識・意識・実践別に分析した相関比を示す。第1根に比較して第2根はかなり小さな値であった。学生生活の充実度グループ別にみた Normalized Score (以下、スコア)

表2. 相関比

健康生活	第 1 根	第 2 根
知 識	0.055	0.027
意 識	0.071	0.038
実 践	0.095	0.035

表3. スコアの平均および分散

健康生活	生活の 充実度	第 1 根	第 2 根	N
知 識	良	0.87±1.62	-0.36±1.01	70
	普通	0.00±1.52	0.08±0.99	621
	不良	-0.88±1.75	-0.35±1.17	69
意 識	良	0.84±1.49	-0.65±1.32	70
	普通	0.02±1.55	0.13±1.37	608
	不良	-1.15±1.35	-0.50±1.44	63
実 践	良	0.93±1.40	-0.94±1.71	61
	普通	0.08±1.73	0.15±1.78	573
	不良	-1.58±1.87	-0.46±1.89	64

の合成得点の平均値および分散を表3に示す。健康生活の知識・意識・実践のいずれの分析についても、第1根では充実度の良グループのスコアは正の値を示し、不良グループでは負、普通グループでは0近傍の値を示した。また、第2根では良および不良グループのスコアがいずれも負の値を示し、普通グループのスコアが正の値を示した。したがって、生活の充実度の良グループと不良グループを判別するためには第1根のスコアが適している。さらに、第1根に比較して第2根の相関比が小さいことから、第2根には注目せずに、以下第1根についての結果のみを示す。

図1に第1根のスコアの度数分布を健康の知識・意識・実践別にそれぞれ示す。生活の充実度の良グループと不良グループの判別の中率(ミニマックスの中率²⁾を用いた)を求めると、健康生活の知識では69.9%、意識では75.8%、実践では77.9%であった。

アンケート票の項目のうち、第1根のスコアの range (以下、レンジ) および偏相関係数が共に大きい方から5位以内にある項目を、知識・意識・実践別にそれぞれ図2に示す。表3にみられる生活の充実度各グループと第1根のスコアとの関連から、充実度の良グループに関連の大きいカテゴリー、即ち正のスコアの大きいものは、意識については、学校生活で人目につくような服装や髪型などをしたいと思いますか

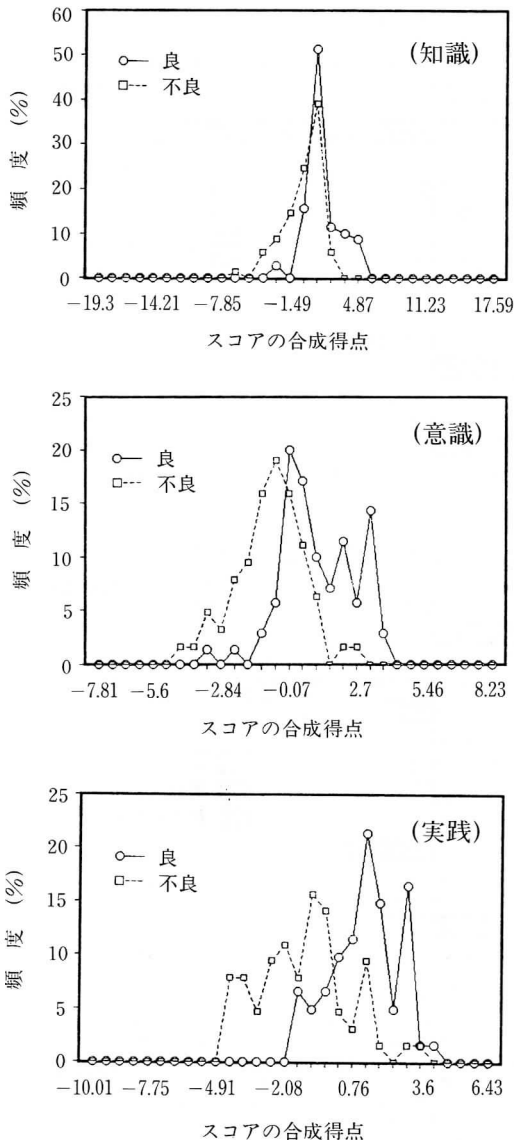


図1 充実度別の第1根スコアの度数分布

「思う」, 家の手伝いをするよりはテレビや雑誌をみたいと思いますか「思わない」等であった。充実度の不良グループに関連の大きいカテゴリー, 即ち負のスコアの大きいものは, (成人したら)タバコを吸いたと思いますか「思う」, 家庭では団らんをするよりも一人で好きなことをしたいと思いますか「しばしば思う」等であった。

実践については, 充実度の良グループと関連の大きいカテゴリーは, 食事に出された料理を不満に思うこ

とがありますか「ない」, 朝起きて登校するまでの時間のゆとりはどうか「ゆとりがある」等であった。充実度の不良グループと関連のあるのは, 小さなゴミを道路や学校に捨てたことがありますか「しばしばある」, 家庭では団らんの中に入り, 楽しくすごしますか「あまりしない」等であった。

知識については, 充実度の不良グループと関連のあるカテゴリーは, 電気掃除機はほこりを吸いとるので, 窓を閉めたままで掃除をしても良い「正しい」, 制服は団体のメンバーが一律に同じ服装をすることに意味がある「誤り」等であった。しかしながら, 充実度の良グループに関連の大きいカテゴリーに関しては, 肌着の材質としては合成セーイ (ナイロン・ポリエステルなど) より木綿が適する「わからない」, 日常生活では食塩摂取量は少ない方が望ましい「誤り」等であり, 知識についての充実度良グループの分析結果には問題がある。これは, 知識に関しては各設問とも正解率が高く, 各項目のカテゴリー分布に極端な片寄りがみられるためと考えられる。

IV. 考 察

学生生活の充実度を表わすものとして, 学習意欲および生活の満足度の有無を取り上げ, この2項目の組み合わせによって学生生活の充実度を良, 普通および不良の3グループに分類した。この生活の充実度を外的基準, 他の健康についての知識・意識・実践に関する項目を説明変数として, データがカテゴリカルな場合の, 重判別分析に呼応する数量化理論第Ⅱ類²⁾による分析を試みた。この分析により, 解答データから学生生活充実度の良グループと不良グループの判別あるいは予測が可能かどうかを検討した。その結果, 相関比は高くなかったが, 判別の中率は知識に関する分析では69.9%, 意識では75.8%, 実践では77.9%であり, 健康生活についての意識および実践に関する項目は学生生活の充実度と関連していると言える。

充実度判別の寄与の目安としてはレンジと偏相関係数があり, レンジが大きくかつ偏相関係数の順位が上位である程, 判別の寄与が高いと考えられる²⁾。充実度判別の寄与の高い項目として, 意識に関しては, 服装・髪型, 家の手伝い, 喫煙, 家庭での団らん等があげられ, 実践に関しては, ゴミ捨て, 食事の内容に対する不満, 家庭における団らん, 早起き等があげられた。したがって, これらの項目に問題点のない学生は生活が充実しているグループ, 即ち学習意欲があり,

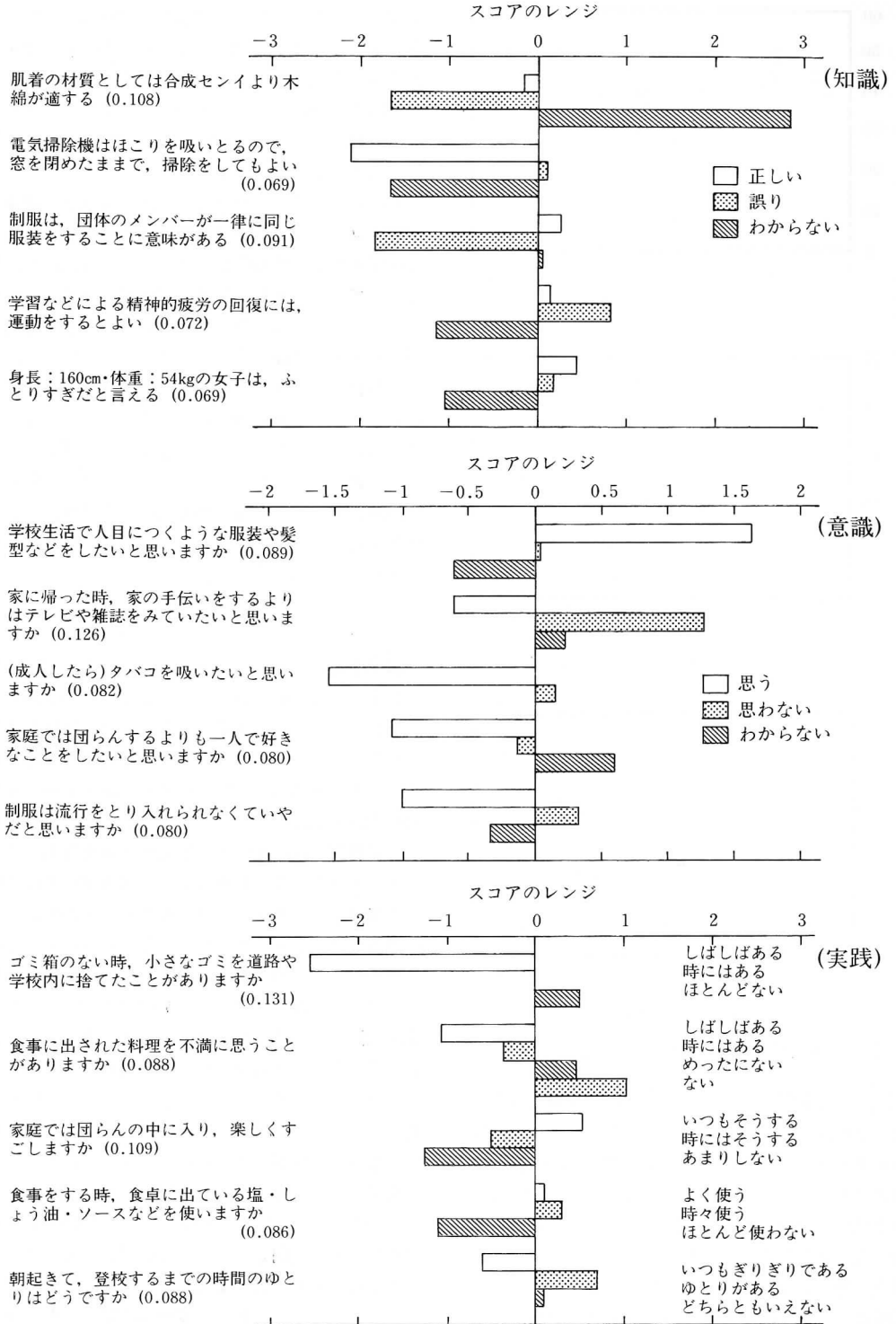


図2 第1根のスコアによる充実度と関連のある項目 ()内は偏相関係数

毎日の生活に満足しているグループに属している。これらはいずれも精神的および社会的な健康に関連する項目である。

なお、健康生活の意識における、服装・髪型に関しては、生活の充実度の良グループの方に人目につくような服装や髪型をしたいと思っている学生が多く、この所見は予想に反する結果のようでもあり注目される。しかしながら、女子学生が毎日の服装・髪型を意識するのは当然であり、むしろ身だしなみをあまり気にしない、極端な場合には、だらしのない服装・髪型の学生の方にこそ問題があるものと考えられる。

高度の専門教育を目的とする4年制あるいはそれ以上の大学と異って、女子短期大学の教育における課題の1つは、学生に学習意欲を持たせ、日々の生活に満足感を持たせることである。また、それは学校保健の課題でもある。著者らは前報¹⁾で、衣、食、住、業(活動)の生活全般にわたった肉体的、精神的および社会的な健康教育が必要であり、とくに学生のもっている健康生活についての知識水準はかなり高いが、実践がそれに伴わないので、それらを結びつけて、実践面の向上につながるような健康教育が必要であることを指摘した。

今回の分析から、健康生活の意識および実践に関する項目は学生生活の充実度と関連しており、とくに精神のおよび社会的な健康の項目が密接に関係していることが指摘される。したがって、女子短期大学生の生活の充実のためには精神のおよび社会的な面の健康教育が必要であり、そのためには学校だけでなく家庭における日常生活を通しての実践的な指導が重要と考えられる。

V. 結 語

女子短期大学生の日常生活における肉体的、精神的

および社会的健康についての知識・意識・実践を調査して、学生生活の充実度に関連する要因を検討した。

学習意欲と生活の満足感の有無の2項目を組み合わせ、学生生活の充実度とし、これを外的基準とした数量化理論第2類による検討を行った。健康生活の知識・意識・実践に関する項目を説明変数とした、いずれの分析においても相関比は高くなかった。しかし判別率の中率は知識69.9%、意識75.8%、実践77.9%であり、意識および実践に関する項目は充実度と関連があった。その回答状況から、充実度の良グループと不良グループの判別がある程度可能である。

生活の充実度と関連のある項目としては、意識に関しては服装・髪型、家の手伝い、喫煙、家庭での団らん等であり、実践に関しては、ゴミ捨て、食事の内容に対する不満、家庭での団らん、早起き等であった。したがって学生生活の充実のためには、精神のおよび社会的な健康面の実践につながるような健康教育が必要である。

稿を終るにあたって、御助言いただいた広島大学医学部衛生学教室 奥田久徳教授に謝意を表します。

VI. 文 献

- 1) 広本雅枝, 田中純子, 前田ひろみ, 福永英子, 鎌田俊彦: 女子短期大学生における健康生活の知識・意識・実践に関する研究, 広島文化女子短期大学紀要, 1985, **18**, pp. 65-75.
- 2) 林知己夫, 駒澤 勉: 数量化理論とデータ処理, 朝倉書店, 1982.
- 3) SAS Institute Inc.: SAS USER'S GUIDE BASICS 1982 Edition, USA, 1982.
- 4) 日立製作所: 数量化理論プログラム PPSS II, 日立製作所, 1984.

Summary

Students' knowledge, consciousness and practice of their healthy life can be seen as a reflection of the degrees of fullness on their living at the college. In this study, a survey was conducted in June, 1984 by questionnaires and 761 students, or 93% of the total of the students at the women's Junior college. And the relationship between students' knowledge, consciousness and practice of their healthy life and the degrees of fullness on their living at the college were studied by using multiregression analysis with the categorical data of the questionnaire.

The degrees of fullness on students' living was defined as the objective variable, and respective questions in their knowledge, consciousness and practice of their healthy life as the explanatory variable, and the analysis was conducted by the statistical method of Hayashi's quantification theory II.

The results of the analysis showed that the first root was not high in the correlation rate in each analysis, while the categorical discriminate analysis of higher levels and lower levels of fullness on students' living revealed a discriminate success rate of 69.9%, 75.8% and 77.9% on their knowledge, consciousness and practice, respectively. The factors regarding students' consciousness and practice of their healthy life had a considerable influence on the degrees of fullness on their living at the college. The factors most closely related to the present fullness of students' living were that of mental and social health.